

第五期第5巻

この巻では傷寒・温病・温疹および傷暑・瘧疾を論じる。傷寒の治法は《傷寒論》を主とするが、論中の重要な方の多くは新たに創製したものである。温病については葉天士・呉又可たちとは別の見解を《傷寒論》を熟読して悟った。暑瘧2証はそれぞれ1項目記したがいずれも臨床経験にもとづく。

◆ 傷寒脈緊および麻黄湯の変通を用いる法の論

《傷寒論》を開くと、「傷風脈浮」「傷寒脈緊」とある。脈浮はわかりやすいが脈緊は特に形容しがたい。形状は回転する縄のようだと説明するものが多いが、回転する縄の形は指の下ではどう触れるか。この脈をただイメージとして形容しても、学者は理由がわからなければにわかに理解できない。ただ緊であることの理由を説明すれば自然に觀念から実際の緊脈を会得できる。

脈緊は必ず有力である。脈の拍動は心臓が主るが、その拍動有力を主るのは、心のみではない。諸臓腑の熱すべてが脈の拍動有力を助け、営衛中の熱も脈の拍動を有力にする。ただ脈が有力である場合は、つねに水面の波のように大で起伏に勢いがあることが多いが、緊脈は有力であるが逆に起伏はないように感じる。実際、嚴寒が外表を束^つむとその収縮する力で営衛の熱が逼迫され、内陷して脈と併存し有力を助長する。しかし収縮する力は同時に脈の拍動を抑圧するので起伏がなくなる。これが緊脈の真相で、本来起伏のない脈に有力があらわれたものである。緊

脈が左右に触れるようになれば、蓄が極まり旁溢した象である。仲景先生が麻黄湯で治すのは、外表を束^つむ寒邪を解すのである。

ただ麻黄湯で外寒を解すと、服用後全身に汗が出て悪寒は癒え、病がそれで治癒することはあるが、ときとしてそれでもなお治癒せずにその後次第に発熱し陽明証に転じる理由は何か？ 私が他人を診察し始めた頃は、やはりその理由がわからなかった。その後麻黄湯を服用して汗が出た後、営衛に内陷した熱が表に戻って汗とともに消散すると、病はすぐに癒えることを知った。熱が再び表に戻らずにますます深く内陷すると、熱は必ず日ごとに増し、これが太陽から陽明に転じる病である。この理屈を理解してからは、麻黄湯を使うときには必ず知母数錢を加えて内陷した熱を解すと服用後に治癒せぬものはなくなった。第三期第5巻傷寒門中の麻黄加知母湯の方後に別の創見を記載したので参考にされたい。

上記で論じたのは麻黄湯に知母を加えるべきものであるが、ときに加えるべきではないものもあるので、このことも注意しておきたい。己巳の腊底〔1929年陰暦12月末〕、天津鼓楼東にある万徳永麵店の40歳近い理事の張金鐸ははじめ傷寒証になって医者にかかり治癒したが、続いて用事で出掛けまた寒さにあたった。表裏ともに寒気をおぼえ、頭痛に呼吸の微喘があり、身体にはわずかに震えがあった。脈を診ると六部いずれも触れないので思わず愕然としたが、心中を尋ねるとまだなんともないというので治せると判断した。この証は重感（感冒の再罹患）に属し、気力体力が低下したところに寒邪が非常に深く侵入して経絡の流通を阻んだので、六脈がすべて閉したのである。麻黄湯加生黄耆1両を投与すると、服用後全身に汗が出てすぐに脈があらわれ病は即座に癒えた。

またもともと身体が羸弱なのに阿片を常用する30歳過ぎの男を治療した。冬に傷寒証を得たが少し医学知識があるので自分で麻黄湯を服用したが少しも汗は出なかった。診察を頼まれ診ると脈は非常に微細で緊ではない。そこで原方に生黄耆5錢を加えると、服用後汗が出て癒えた。この2症例はいずれも麻黄湯を用いるが、知母を加えるべきではなく、黄耆を加えるべきものである。

また季冬〔陰暦12月〕に傷寒証を得た少年を治療した。陰分にもと
 もと不足があり脈が6至に近く甚だしい弦細で、身体が冷えて悪寒があ
 り舌苔は淡白である。診察を頼まれた医者には「脈が数で弱いので傷寒の
 初期だが、恐らく麻黄で強いて発汗すべきではない」と言う。このとき
 私はその近隣に往診を頼まれてその家を通りかかり、招かれて往診に來
 ていた医師と話し合った。私は「麻黄は発汗作用が強力であるが少量な
 ら差し支えはなく、さらに補正の品で補えば自然と穏和に奏効する」と
 説明し、麻黄1.5錢・桂枝尖1錢・杏仁1.5錢・甘草1.5錢に生山藥・
 北沙參各6錢を加えて処方を書き、煎服後2時間しても汗が出なければ
 アスピリン2分程度を服用させて発汗を助けるように言いつけた。方法
 どおりに服用すると全身から汗が出て癒えた。

また隣村に住む李姓の少年は、傷寒証を得てすでに10日経っても表
 証が残り、ときに悪寒がして、かすかにまだ頭痛がある。舌苔がまだ白
 で、心中に微かな熱感をおぼえ、小便は黄色く、脈は浮弦で重按すると
 有力のようである。これは熱邪が太陽の腑（膀胱）に入ったもので、麻
 黄湯に知母8錢・滑石8錢を加えて投与すると、服用後ひと汗かいて治
 癒した。

按：この証は太陽の表と腑にあるが、じつはすでに陽明に連続してい
 る。したがって方中では大量の知母で陽明の熱を清し、麻黄でその表を
 解し、まだ完全には清解していない余熱を汗から消散したので、ひと汗
 かくと治癒した。《傷寒論》中には病が再び太陽に戻った場合は同様に
 麻黄湯で治療すべしと記されるが、私はこうした証には麻黄湯に必ずさ
 らに知母を加える。

麻黄の適量については、やはり地域に応じて分量を加減すべきであ
 る。私が故郷にいたときには、麻黄で発表する場合は多くても4錢以上
 は用いなかった。その後南方の漢皋^{かんこう}に行くとき麻黄は2錢用いるに過ぎな
 かったが、戊午〔1918年〕に北方の奉天にきてみると麻黄6錢で発表
 してもようやく汗が出る程度が普通であった。このことからその地域の
 気候を考慮し身体の強弱を判断し、とりわけ人については旅から旅で苦

労しているか、屋内で生計をたてているかなどを聞くべきで、土地や人によって適宜使用量を決めれば証に臨んでもおのずと間違いがない。

◆ 大青竜湯中の麻黄は薄荷に代えるべしを論ず

〔訳注：次の論文にあるように、張錫純自身がこれは麻黄ではなく、桂枝を薄荷に代えるべきであると改めた見解をのちに述べている*〕

古い時代は薬物の数が少なかったが後世になると品数が増えた。辛涼解肌¹の薄荷は本来外感有熱の要薬であるが、《神農本草經》〔中国最古の本草学書《神農本草經》であり、《本經》と略称する〕にも《名医別録》〔漢～魏・晋代の本草書で梁の陶弘景の編とされるが疑問がある。《別録》と略称され、《本經》を臨床的に解説するとともに増補した〕にも記載がない。そこで《傷寒論》で薄荷を使用すべき諸方に仲景が用いていないのは、当時薄荷は苛²といい、ときに苛辣味を食品調味料として利用することはあっても、まだ薬として用いなかったためである。隣村武生に住む30歳過ぎの夏³彭齡⁴は冬に風寒感冒となり、全身の悪寒と無汗で胸中に甚だしい煩躁をおぼえ、本来大青竜湯証⁵なのに、医者が麻黄湯を誤投し、服用後汗が少しも出ずにますますはげしく煩躁し、ほとんど癡狂状態⁶で脈は洪滑浮であった。麻黄を薄荷葉に代えた大青竜湯を投じ、さらに誤服した麻黄湯中に桂枝があるので、桂枝も臨機応変に除いた。服用して2杯目を飲むころには洗うが如き汗が出て症状がとれた。

按：この証ははじめからあった蘊熱⁷が外寒の収束を受け、ますます深くなり煩躁を生じたものである。方中では大量の石膏で蘊熱を化し、熱が化すと散じようとする外越の機序⁸がはたらき始め、さらに辛涼解肌⁹の薄荷で利導し容易に汗を出させた。それまでに麻黄湯の誤服がなければ本方を用いる際に桂枝を除く必要はないが、大青竜湯原方でも用いる桂枝の分量はもともと多くない。

* 訳者参考〔太陽中風、脈浮緊、発熱悪寒、身疼痛、不汗出而煩躁者、大青竜湯主之。若脈微弱、汗出惡風者、不可服之、服之則厥逆、筋惕肉瞤、此為逆也（38）。